

【二等賞】—海外の大学生



「BOKURA（僕ら）の明日」

（スーダン。ハルツーム大学・女・二十歳）

私は「日本」という言葉を聞くと、温かくなつかしい気持ちになります。今までいろいろな場面で日本人に支えてもらったからです。日本について、知っていることはほんの少しですが、スーダンで出会った日本人のおかげで、私は日本にとっても感謝の気持ちを持つようになりました。

私は小さい頃から人と関わるのが苦手で、恥ずかしがり屋でした。大学に入ってから、初めて家を出ましたが、私は大家族で育ったので、寂しい思いをしていました。昔から日本のアニメが大好きだったので、大学で開かれた日本語の公開講座に登録しました。そこで、初めて日本人に会いました。

日本語を勉強し始めてからも、最初はいつも一人で教室にいました。でも、ある日、日本人の先生が私に話しかけてくれました。いつも一人だった私には初めてでした。「あなたは私の娘みたいね」。私が一番好きな先生の言葉です。先生は私たちの寮によく遊びに来てくれました。先生がいなかったら、私は大学を辞めていたかもしれません。先生は本当に母のような存在でした。

先生のおかげで、クラスメートとも仲良くなれました。前は話し相手がいることが夢のようにでしたが、今はまわりにたくさん友達がいる、みんなに「うるさい！」と言われるぐらいになりました。

そして、大学三年生になった時、スーダン人よりスーダン人らしい日本人の先生にも出会いました。スーダン人の私も食べたことがない食べ物や行ったこともない場所について、話をしてくれました。

別の日本人の先生は、優しく、そして厳しかったです。間違った場合、ちゃんと反省をすることを教えてくれたました。本当の大人として、責任をもって物事に取り組むことを教えてくれました。

私たちは二〇一五年九月十九日に、日本人との絆のために「BOKURA」というイベントをしました。「BOKURA」はアラビア語で「明日」という意味です。つまり、このイベントは「BOKURA（僕ら）の明日」という意味で、スーダンと日本の明るい未来を願って行われました。スーダンのトープという服と日本の着物を合わせて「ユカトープ」という名前の服を作ってファッションショーをしたり、日本人がスーダンの歌を歌ってくれたり、ゆかたやトープを着て写真をとったりしました。

日本人と過ごした四年間は、私にたくさん大切なものをくれました。そこで、気づいたのは、どんな人に出会うかによって、人生は変わるということです。「日本」は、私に希望や幸せをくれた国です。それが私にとっての「日本」です。

【二等賞】—海外の大学生



独特の「色鮮やかな国」

(ハンガリー。カーロリ ガーシュパール大学大学院・女・二十四歳)

三歳の時、両親と日本へ行き、十三歳まで日本にいた。それから、もう十年以上が経った。今も日本語を勉強し、大学院で日本文化を研究している私にとって、日本は独特の要素を持った「色鮮やかな国」だ。

当時、東京では、音や色など沢山の刺激に圧倒され、目にするもの何もかもが息を飲むくらい新しかったのを覚えている。街中の建物や道路などは綺麗に洗練され、二十四時間開いてるコンビニやたくさん並ぶお店には欲しいものが揃っていた。電車は時間ぴったりに到着し、たくさんの人を乗せていく。そうした風景に日本人は皆どこか急いでいる印象があった。そんな近代的なイメージ溢れた日本だったが、昔から伝わる伝統や美の心を忘れていなかった。また、日本では四季の移り変わりを味わうことができるが、移り変わっていくものに対して日本人は儂さを感じる。春には桜の美しさに浸り、梅雨が明ければ猛暑に入る。秋には木々が美しい赤に染まり、冬には炬燵の中で暖まる。ほかの国では味わえないような日本の調和感が、私はとても好きになった。

日本ではたくさんの親しい友達に恵まれた。長い月日が経った今でも連絡を取り合っているが、日本人の丁寧さ、相手を思いやる心、他人への配慮の気持ちや謙虚な振る舞いは、とても印象に残るものだった。感謝も謝罪も「お辞儀」で表現し、頼みごとがある時はいつも「宜しくお願いします」と礼儀正しく付け加える。「謙遜」という言葉も日本独特で、ヨーロッパの人々にはなかなか理解しづらい。

今では、海外でも残業しながら仕事を頑張っている日本人の姿をよく見るが、やはり流石だなと思う。日本人は勤勉で真面目だと言われているが、まさにその通りだ。やり始めたことは責任を持って最後までやり遂げる頑張り屋だ。

日本人と一緒にいて、もう一つ気づいたことがある。それは、日本人が説明事を好まないことだ。「一を聞けば十を知る」とあるように、たった一言だけで分かり合えるのが日本文化だ。でも、それもまた、日本の魅力の一つだと思う。海外には、そういった文化はあまり存在しない。こういった日本独特の要素があるからこそ、日本は日本なんだ、と思う。

「日本」という国で得た経験はかけがえのない宝物だ。一言でまとめるのは難しいが、私にとって、「日本」は綺麗で優しい国、そして「今」と「昔」が混ざった「色鮮やかな国」だ。

【二等賞】—海外の大学生

「人を思いやる」心



宋 啓超

(中国。吉林大学・男・二十二歳)

日本語を勉強してもうすぐ四年目を迎える。日本はどんな国だろうか？日本に行くまではずっとぼんやりしていた。中日戦争の歴史を勉強してきた自分としては、日本という言葉対象国に好感を抱いていなかったと言ってもよい。しかし、一年間の交換留学生活のおかげで、日本という国が段々好きになってきた。

二〇一五年、私は日本への留学機会に恵まれ、熊本大学で一年間勉強をしていた。最初は、日本がきれいだなと思っただけで、別に好きになったことはなかった。しかし、不幸にも、私は翌年の二〇一六年四月、四百年ぶりという熊本地震に遭遇した。前震に無頓着な私は、本震が来た時にまさか自分が生きている間にこれほどの地震に遭遇するとは夢にも思わなかった。まだまだやりたいことがいっぱい残っているのに、と泣こうにも泣けなかったが、仕方なく私はみんなと一緒に避難所へ行った。

避難所の生活は決して楽なものではなかった。物資の不足、降り頻る雨による土砂崩れの恐れといった酷い状況の中だった。ところが、避難してきた人は、老若男女を問わず、みんな列に並んでご飯をもらい、お年寄りを優先的に避難所へ入れて、慌てずに指示に従って行動していた。そんな日本人の姿を一生、私は忘れることはないだろう。

もしかしたら、地震が何回も何回も日本に来ていたので、みんなは地震が恐ろしくないと考えているのかなと最初私は思った。しかし、怖がっている人々の顔を見て、私は避難している日本人たちは怖いと思っていないということではないことがすぐに分かった。そして、これこそが、日本人の「思いやりの心」だと思った。一人一人が「思いやりの心」を持っていてからこそ、あんな状況の中でも秩序正しく行動していたのだ。私もそのような「思いやりの心」に感化され、日本人と同じように行動している自分に気づいた。知らず知らずのうちに「自分より他人」という「思いやりの心」を持つようになっていた。

今、日本人の接客の良さやきれいな街づくりに感心している人は少なからずいると思う。実は、振り返ってみると、それも日本人が他人を思いやる結果なのではないだろうか。一年間の留学で、外見から内面へ、と少しずつ日本という国が分かるようになってきた。それと同時に、この「思いやりの心」を持っている日本も好きになった。この「思いやりの心」が、私が感化されたように、これからどんどん世界中に広まっていけばいいと思う。



「夢」を叶えてくれた『日本』

ポーレット・ドール

(チリ。チリ大学・女・十九歳)

私はチリという国に住んでいます。将来、日本語教師になって、チリに、スペイン語と日本語の通訳や翻訳のための大学を創る、大きな夢を持っています。

「日本」はどんな国か？と聞かれたら、私にとって、「日本」は私の夢を叶えるための国であり、距離が離れていたとしても、関係なく、夢を叶えてくれる「国」だと、信じています。チリは日本からずいぶん距離があつて、文化や伝統がとても違うので、小さいころから「日本」のことに興味がありました。日本の一番好きなところは言語です。なぜなら日本語を通じて、日本人、日本文化、日本の伝統を理解できるからです。

私の地元は小さな村なので、高校のときには日本語学校で勉強をする機会がありませんでした。高校を卒業し、サンティアゴにある大学に入るために都会に引っ越し、やっと日本語学校に入学しました。しかし、期待していた学校とは全く違い、生徒たちの日本語能力は非常に低くて、私は落ち込みました。

なぜ、チリで教えられている日本語のレベルがこんなに低いのかというと、日本語を生かした進路選択や将来設計、「社会人」や「働くこと」を考慮したコースがないためです。ただ趣味で日本語を学びたいと思っている方のために教えられています。チリでは、日本語教育に関連する施設は非常に少ないため、選択肢は限られています。したがって、チリ大学で日本語を仕事の為に勉強するのは非常に難しいことです。

私の将来の夢は日本語の教師になることであり、その夢を叶える為に、毎日一所懸命日本語を勉強しています。日本語を趣味のレベルで教えるのではなく、きちんとしたキャリアとして教えていきたいです。

チリと日本では大きな共通点がたくさんあります。漁業、火山噴火や地震対策等であり、両国は助け合えることが沢山あります。将来、「夢の大学」では、両国の多くの共通点を勉強していくことや、スペイン語を学びたい日本の方のためにも、日本にあるスペイン語学校との交換留学をすることができるようになりたいです。ここでは日本語だけでなく、中国語や韓国語など、アジア系の言葉も教えられたら素晴らしいと思っています。

チリで、いつか、日本語を使った仕事が現実のものになるように努力を重ねています。地球の真逆に位置するチリと日本ですが、言語の壁を超えた両国の絆や関係がもっと強くなることを願っています。

【二等賞】—海外の大学生



「金継ぎ（きんつぎ）」の国

メリツサ・パーク

（オーストラリア。ニューサウスウェールズ大学・女・十八歳）

私は中学の頃から、ずっと学校で日本語の授業を受けてきた。

授業を通じて日本の文化、価値観、伝統などを勉強する機会が多かった。今まで学んだことは様々であり、貴重でもあり、今でも日本の独特さに魅了されずにはいられない。

そして、今思うのは、「日本」は間違いなく個性的な国である。

「日本という国」が、私の目にどう映ったのか。

いろいろなことを勉強した後、自国のオーストラリアと日本との違いを知ることができた。そして、世界への視野を広げることができた。

特に、私の注意を引いたのは、日本人の物の考え方、つまり「精神」のことである。

私は、「金継ぎ（きんつぎ）」という言葉聞いて、とても興味深かった。

「金継ぎ」とは、壊れた器を修理するために、日本で生み出された「技」である。ある食器が壊れてしまっても、それを捨てずに「漆」を使って直し、最後に「金粉」を「漆」

の上からさらに塗るというものである。

初めて「金継ぎ」のことを聞いたとき、深く考えさせられた。

「金継ぎ」は、日本人の精神を表している、と思う。

食器のひび割れは、「人生における困難、落ち込み、挫折」を象徴する。

しかし、食器を捨てない「金継ぎ」のように、苦難に遭っても、諦めないで頑張り続ければ、以前より強い自分になれる。「金継ぎ」は、そのような精神を表しているのだ、と思う。

例えば、二〇一一年に起こった東日本大震災の後、東北地方だけではなく、「復興」という目標に向けて全国が一丸となって頑張っていた。

それを見て、日本人は、協力と団結心という一体感を大切にすると人々だということが分かった。

日本の魅力は、物質的な文化に限らない。

目には見えない日本人の精神の根底には、「金継ぎ」のように、日本独特の強い精神があると思う。それが、私が日本に深い興味を持っている理由の一つかもしれない。



「完璧さ」を具現する国

アリアンナ・マルティネッリ

（イタリア。サピエンツァ大学・女・二十二歳）

私は、三年前から日本語を勉強し、今、大学の東洋研究学部で、日本語と日本文化を専攻しています。これまでの勉強の結果、日本は「完璧さの理想を具現する国」だと思います。

私は日本の文化、特に古くから伝わるユニークな行事に強い興味を持っています。例えば、「成人の日」です。成人式で成年に達した若者が和服で「神社」へお参りに行くのはとても面白い習慣だと思います。イタリアには大人になった若者のための祝日などは特にありません。

日本文化の中で、「自然」が尊重されていることに強い共感を覚えます。「自然の尊重」は、日本の伝統芸術である華道や茶道の根底になっていますが、日本の宗教に密接に関係しています。「神道」は実に興味深い宗教で、自然が精神を形作っていることに、私は驚きました。「神」は自然の力の表われで、「自然」は神の住居です。日本には世界に類のない自然の風景があり、神社は林の奥に建てられています。ところで、私は「折り紙」に夢中ですが、折り紙も宗教に関連しています。神社では御幣（ごへい）が使われていて、畳んだ紙で「神」の存在を象徴したものです。折り紙はたいへん奥が深い遊戯だと思います。

また日本人は、礼儀正しく親切で、他の人を大切に扱うと聞きました。中でも私の非常に好きな言葉は「思いやりの気持ち」です。この言葉は日本人の特徴を表現しています。他の人が主役で、いつも他の人の気持ちを尊重し、頼まれる前に他の人の願いをかなえてあげようとする日本人の心は、素晴らしいです。日本人とイタリア人は対照的です。イタリア人が自分の感情を強く表現して外向的なのに対して、日本人は内向的です。性格の形成には、学校が重要な役割を果たしているように思います。学校で子供たちは人生の手ほどきを受け、社会的慣習を学びます。日本の学校にあるいろいろなクラブは個人の性格形成に貢献しているようです。

日本の大学について考えると、肯定的な面は「大学での勉強が就職を保証している」点だと思います。就職の機会も日本のほうがずっと多いようです。一方、大学の否定的な面は「入学試験の複雑さと過度の負担」だと思います。大学だけでなく、日本の学校組織はイタリアのそれに比べて厳格すぎるかもしれません。しかし、それは日本の社会が潤滑に機能するための根幹を成しているので、「完璧さ」かもしれません。

私は、日本の文化・社会全ての面に強い関心を持っています。その知識をもっと掘り下げるために、是非、日本に行きたいと心から願っています。



世界に誇れる「集団尊重主義」

バリウリン・アンナ

(モルドバ。ロシア国立大学・女・二十歳)

「日本語」の授業で、「うち」と「そと」の概念について習った時、日本語と、私の母国語であるルーマニア語では、社会の認識の仕方に違うことに気がついた。それ以来、異なる言語を話す人たちが、それぞれ、社会の中で自分自身をどのように位置付けているのか、という問題について考えるようになった。

西洋人の私たちは、自分自身を行動の中心に置く傾向があるのに対して、日本人は、客観的に、物事を外から見ているように思う。例えば、西洋人は「私」という代名詞をよく使う傾向があるけど、日本語にはそれが無い。この違いは、どこから生じるものだろうか。ヨーロッパに比べて、日本では、集団主義、集団尊重の考え方が発達しているように思う。

日本では、集団尊重主義は、日本が抱える問題の一つだと考える人もいるようだ。日本で生まれ、日本で育った友人は「日本では、個性を發揮しようとする」と邪魔をされ、時にはじめに至ることもある。日本人は日本社会の一部でなければならぬという風潮が嫌いだ」と言っていた。私は残念ながらもまだ日本に行ったことがないので、彼の意見に対して、説得力のある反論はできない。けれども、日本の「集団尊重主義」は、私にとって、日本の美德の一つであり、「日本という国」に魅力を感じる重要な理由だ。

一例を挙げれば、経済復興だ。戦後の日本経済は、「奇跡」とも呼ばれる急速な発展を遂げた。それを可能にしたのは、保護主義や管理貿易だけでなく、各企業が、国益のために、政府と密接に連携しつつ経営を行ったこと、また各々の労働者が、会社の経営方針に従って尽力したことだ。そうした集団尊重主義なくしては、日本の経済発展はありえなかった。

日本の皆さんは、こうした環境や考え方に慣れていて、当然のように思われるかもしれないが、私が生まれ育ったモルドバでは、事情が大きく異なっている。モルドバ人は日本人に比べて非常に我まま、個人主義的で、他人をあまり信用しない。もし、モルドバの人たちが、日本人を見習って、自分の利益よりも、少しでも集団や社会を尊重するようになれば、モルドバの経済も発展するのではないだろうか？

私にとっては、日本のいわゆる集団尊重主義は、決して短所や問題ではなく、むしろ日本の長所だ。日本は、社会に尽力しようとする国民の努力によって、世界でも有数の経済大国となった国だ。日本の「集団尊重主義」は、世界に誇るべき長所です。



「残業」に支えられた日本社会

ローレンス・ミラー

(イギリス。リーズ大学大学院・男・二十五歳)

馬が目の前にぶらさげられたニンジンを得ようと必死になるように、日本では、人々は仕事に従事し、日々膨大な時間を仕事に費やしている。終業時間を過ぎても働き続ける、つまり『残業』をする日本人を見つけることは容易で、むしろ大多数が日常的に残業を行っているのではないだろうか。

ALT (外国語指導助手) として日本で二〇一三年から二年間働いた経験から、大げさかもしれないが、日本社会で生きていくうえで、残業は必要不可欠だ。むしろ残業によって、日本社会は支えられていると言っても過言ではないと僕は考える。

イギリスでは、特に仕事に関しては“明日できることは明日”という考え方で、終業時間になったら帰るべきという態度をとることが一般的である。それに比べて日本では、“今日できることは今日”という気持ちで、終業時間になっても帰るべきではない、という考えを持つ人が多いように感じる。それを暗黙の了解とする日本の常識があることは確かであるし、そういった日本の常識が、誰かに強制されるでもなく、人々が自然に残業を行うに至る背景であると考ええる。

その一方で、残業をすればより多くの業務を終えることができ、新しい仕事に着手することもできる。多くの業務を自分が処理しているという、ある意味、職務に対する熱意を、残業に置き換えている人も多いのではないだろうか。つまり、「日本社会のルール」に従うために、残業をしているのではなく、「自分の興味」を満たすため、ニンジンを得るために残業をしている人も多いという側面があると思う。

日常的に残業を行う「仕事人間」の日本人を僕は何人も知っているが、皆仕事に一生懸命で、結局のところ仕事が好きなのだと思ふ。日々のほとんどを仕事に費やし、その仕事で自分の肩書であり、自分という人間を形成する要素の大部分である、と考えている日本人は多い。

社会のグローバル化により、仕事以外のプライベート重視のライフスタイルを好む日本人が増えていることは確かだし、過労死など残業に付きまとうネガティブな一面があることは否定しない。しかし、仕事に自分自身の存在価値を見出し、身も心も仕事に捧げる程の覚悟を持つことができる日本人の性格は世界が真似をしようとしても容易ではないはずだ。

「仕事人間」の日本人に、僕自身が一種の憧れを持っていることもまた確かである。



胸を打たれた「空港の光景」

ヴォロシナ・タチヤーナ

(ウクライナ。社会人№ドニエプロペトロフスク国立大学卒・女・三十二歳)

『日本』のことを思うと、すぐに日本の空港の飛行機の窓から見た光景が私の頭の中にはつきり浮かんできます。

日本人にとっては平凡なことかもしれませんが、その光景に私の胸は強く打たれました。

私は、二〇一二年に一ヶ月間横浜国際教育学院で日本語を勉強し、二〇一六年一月に二週間、に家族と一緒に日本を旅行しました。日本人の礼儀正しき、贅沢な自然、綺麗な空気が、美味しい料理など、思えば沢山ありますが、一番印象に残っているのが、日本を離れる時の「空港の光景」です。

飛行機が滑走路へ出る時に日本の空港のスタッフが飛行機に向かって一列に立って手を振っていました。それに気づいて手を振り返したのは私だけだったと思います。その後起こったことは一生忘れられないことです。涙をこらえることが出来ませんでした。手を振った後、その人たちは一丸となってお辞儀をしました。今でもこれを書いてみると涙がこみ上げてきます。この感情はこの時の光景を自分の目で見ないと分からないかもしれません。この出来事は日本の国民性をはつきりと表していると思います。

不思議なことに、日本は私にとって故郷のように感じられます。それは消すことのできない気持ちです。私がどんなに日本に長くいても日本人にとって私が「外人」であることは変わらないということは分かっています。日本に来ると、何となく安心して故郷に帰ってきたような気がします。

もちろん他の国と同じように、日本にもよくないところもあるかもしれませんが、いいところが数えきれないほどあります。日本の一番大きな欠点は、様々な天災が多いことだと私は思います。日本は地震、台風、津波が多い国です。これらをもたらす被害が大きくなると元の生活を取り戻すことはすごく大変だと思います。

でも、日本人の勤勉さや我慢強さ、楽観主義などにとっても感心しています。地震とかが起きる度に色々な復旧をしなければなりません。被災者や犠牲者が出るのは辛い事ですが、地震に強い建物や地震発生時に電車がすぐに停まれる安全装置など、教訓が色々な所に活かされています。もし日本が災害の多い国でなかったら、こんな便利な都市になっていたかは分かりません。

日本人はいつも結束して困難に打ち勝ちます。非常に感心します。でも、これ以上天災が起こらないように、家族や友達を無くさないように、建物を再建しなくてもいいように、いつも祈っています。

この素敵な国と国民に神のご加護と祝福がありますように。

身に付けたい！「気くばり」

オゲン・サンガン

（ネパール。ゴレスア카데미日本文化経済学院・男・二十三歳）



わたしは日本人の習慣のなかで、日本人の「気くばりの精神」に感心しています。

たとえば、日本の食事のあいさつの仕方に関心します。食前、日本人は手を合わせて「いただきます」といい、食事が終わったなら「ごちそうさまでした」といいます。料理をつくってくれた人だけではなく、お米や野菜を作ってくれた人たちへの感謝、食材に対する感謝の気持ちが込められています。なんとやさしい気くばりなのでしょう。

出かけるときは「いってきます」「いってらっしゃい」「きをつけてね」、帰ってきたときは「ただいま」「おかえりなさい」とあいさつします。

わたしは居酒屋でアルバイトをしています。帰るときは「おさきに失礼します。おつかれさまでした」と元気よくあいさつします。これは日本人の「気くばりの精神」だと思います。

ある日、わたしはアルバイト先で、使った包丁をちゃんと片付けないで、自分が使いやすい場所におきました。それが原因で包丁が床におち、同僚がけがをしてしまいました。わたしは店長にとてもしかられると思いました。店長はこう言いました。「日本ではおもいやりが一番大切だよ。おもいやりとは自分のことより、他人のことを考えて気をつかうことなんだ。どうすれば、同僚がはたらきやすいかを考える。お客様には丁寧な言葉と態度で接することも大切です。自分よりも、まず相手のことを優先して行動する。それがおもいやりだよ。」

店長は「おもいやり」の意味を、わたしに「おもいやり」をもって教えてくれたのです。わたしはこの店長の「気くばり」に感動しました。わたしはその日から「気くばり」というものを、自分のものになりたいと思うようになりました。

しかし、「気くばり」にはマニュアルがありません。気くばりという能力は日本人独特の能力だと思います。気をまわす、気転がきく、気をつかう、など、「気」が頭にくる言葉は気くばりの基本です。たとえば、父親が「タバコ」といえば、こどもはタバコだけではなく、灰皿とライターも持ってこなければなりません。このような「気くばり」は、外国人にとってはかなりハードルが高い習慣です。

自分よりもまず相手のことをかんがえ、「おもいやり」をもって行動すること。わたしの「気くばり」はまだまだですが、この日本人の「気くばり」の精神を身につけていきたいです。